

1. それからイエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。
2. ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。
3. 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見るができなかった。
4. それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。
5. イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」
6. ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。
7. これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。
8. ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私のだまし取った物は、四倍にして返します。」
9. イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」
10. 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

説教

今日は、ザアカイとイエスさまの出会いについて共に学びましょう。ザアカイの話は教会学校でもよく話されるところで、子どもたちもよく知っています。

「それからイエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。」(1) エリコはエルサレムに近く(27 km 東北東)、良質の泉があり、砂漠の中のオアシスとなっていたため、「なつめやしの町」、緑と花の香り豊かな「神の楽園(パラダイス)」と呼ばれました。ここのバルサムには高い税金がかけられていました。そこにイエスさまが来られたのです。

この時、ザアカイという人物が登場します。「ザアカイと呼ばれる」が直訳で、「ザアカイ」は「ゼカリヤの短縮形」で、「義人」あるいは「きよい人」という意味です。彼は「取税人のかしらで、金持ち」でした(2)。「取税人」とは税金取りのことですが、今日で言う国税局とか税務署の職員というのとは少しニュアンスが違います。まず、この税金がどこへ収められるかと言えば、ユダヤを支配するローマ帝国に収められます。つまり、彼らにとっては憎き宿敵であるローマに収める税金なのです。しかも、それを徴税するのがユダヤ人の「取税人」ということなのですから、彼らは同胞のユダヤ人からは裏切り者と見られていました。ユダヤ人であってユダヤ人ではない、敵国ローマの側につき、ローマという虎の威を借りて同胞を虐げ搾取する、それが「取税人」でした。しかも、ローマに収める定まった税金に上乗せして徴税できる権限を持っているのですが、そこは「取税人」の裁量で、その上乗せ分が彼らの所得となります。ですから、思いのままふっかけて徴税することも可能です。言わば、泥棒まがい、詐欺まがいの仕事でした。こうした裏切り者にして詐欺師というのが当時の取税人の印象で、ザアカイはその「取税人」たちを束ねる「かしら」であり、多くの情け容赦ない取り立ての甘い汁を吸って私服を肥やして「金持ち」となった成金でした。「金持ち」と言えば人々の憧れの的ですが、貧乏人の血税を吸い上げて成り上がったという罪深さと人々の軽蔑、さらには罪悪感と後ろめた

さが常につきまとう職業でもあり複雑です。実際、取税人は「異邦人、罪人」と並び称されます。神の律法を知らない「異邦人」、さらには同様に律法を知らずに罪を犯す「犯罪人」と同類に扱われるほど、取税人は敬虔な律法学者からは罪の職業と見られていました。そのザアカイの住むエリコの町にイエスさまが通り過ぎようとしています。

「彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見るができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。」(3-4)「彼はイエスがどんな方か見ようとした」とあるので、おそらくザアカイは既にイエスさまについていくつかの話を聞いていて、それで強い関心を持ち、「イエスがどんな方か見ようとした」のでしょう。でもものすごい数の群衆がイエスさまを取り巻いていたので、近づくことができません。しかも自分は「背が低かった」ので、「群衆のため見ること」さえできませんでした。普通の物見遊山の群衆なら、人だかりの中に混じってお祭り気分を味わって、ああ面白かったで済むところです。ザアカイ以外の群衆はみなそうしていました。でも、ザアカイは違います。彼には「イエスがどんな方か」を何としても知りたいという、切実な熱望がありました。このままイエスさまを見ないで一生を終わりにたくありません。イエスさまを直接この目で見たい、それで「イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った」のでした。

すると、イエスさまは、木の上でイエスさまを見つめるザアカイを見上げて、言われます。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」(5)「ザアカイ」とイエスさまは彼の名を呼ばれます。何とイエスさまはザアカイの名を知っていたのです。ザアカイ自身は「イエスがどんな方か」をよくは知らなかったのですが、イエスさまはザアカイがどんな人間かを知っておられました。そして「急いで降りて来なさい」と彼を呼びます。その理由は「今日は、あなたの家に泊まることにしてあるから」というのです。

何気ない会話のように見えますが、その意味はザアカイには身に染みてよくわかっていました。人の家に泊まるというのは、余程親しい間柄でなければできません。ましてやザアカイは前科者と同類の取税人です。敬虔なユダヤ人なら近寄りません。食事もしません。話もしないでしょう。それなのに、イエスさまはザアカイの「客」となられました。彼の家に泊まると言われたのです。それは、罪深いザアカイを受け入れ、赦し、家族同然に彼と親しく交わりを言うに等しいことです。形の上では、ザアカイが、たまたま自分の前を通り過ぎようとしていたイエスさまを自分の家に宿泊させる、ということになります。でも、神であるイエスさまの永遠の計画の中には、イエスさまがわざわざザアカイの所に足を運び、ザアカイの名を呼び、彼に声をかけて、彼の家に宿泊することで、イエスさまが御自身との交わりの中にザアカイをお招きになったのでした。ザアカイの家よりももっと大きな家、もっときよい聖なる家族、栄光の天にある神の家族へとザアカイを招きました。イエスさまを求めるザアカイに声をかけて、彼を呼んで、彼と寝食を共にして、彼の家族となられたのです。

このイエスさまの招きに、ザアカイは「急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎え」ます(6)。「急いで降りて来い」とのイエスさまの命令に忠実に従って、「急いで降りて来」ます。しかも、渋々、嫌々ならでなく、「大喜びで」イエスさまを歓迎します。イエスさまが罪深い自分を赦して受け入れて歓迎してくださったので、ザアカイもまた「大喜びで」イエスさまを歓迎したのです。そうじゃないと、こんなケチな人間が「大喜びでイエスを迎え」るはずがありません。

でも、ザアカイ以外の人々は「あの方は罪人のところに行って客となられた。」とつぶやきます(7)。「これを見て、みなは」とあるように、酷いようですが、これが通常の反応でした。当時の常識です。罪の仕事でたんまり儲けた成金ザアカイを、人々はただ一言、「罪人」と呼びます。お金はあり、大金持ちで、おそらく大きな家に住んでいたことでしょうが、その生涯を一言で評価すると「罪人」でした。ザアカイは、ユダヤ人一

般の目には「罪人」と映りましたが、それ以上にイエスさまの目には真に罪人と映っていたことでしょう。でも、そんなことは知っていながら、それでもイエスさまはその「罪人」ザアカイを愛されたのです。

人々の非難を耳にして、ザアカイは「立って」イエスさまに告白します。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」(8) ザアカイ回心の告白です。前半の「私の財産の半分を貧しい人たちに施します。」とは、罪深い自分を受け入れてくださったイエスさまの愛に応えての感謝の告白です。そうじゃないと、こんなケチな人間が私財の半分も貧乏人に施すはずがありません。これと全く正反対の半生をこれまで生きてきたのですから。後半の「また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」とは、これまで自分が犯してきた罪に対する悔い改めの告白です。律法によれば、通常は1～2倍の弁償で済みます(民数記 5:7)。「四倍返し」は強盗の場合だけです(出エジプト 22:1)。つまりザアカイは、自分がこれまで犯してきた自分の罪を最悪の「強盗」に等しき犯罪だと告白していると同時に、その悔い改めを表明しているのです。ザアカイは、実は、律法をよく学んで熟知していました。彼もまた神の民イスラエル人であり、「アブラハムの子孫」だったので

す。ザアカイの告白を聞いて、イエスさまは宣言なさいます。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」(9)「救い」とは、罪と滅びからの「救い」です。死ぬべき罪人にとっては、神の怒りからの「救い」が人生最大のテーマとなります。神の怒りから「救出される」あるいは「脱出でき」なければ、人は罪のために永遠の滅びに投げ入れられなければなりません。死ぬべき罪人が一体どのようにして神の怒りから救われることができるのでしょうか。それは、救い主であるイエスさまが「来る」ことによつてです。イエスさまが罪人ザアカイの所に来て、彼を呼び、彼と寝食を共にすることで、彼を赦し受け入れたことを示しました。「救いがこの家に来た」とイエスさまが言われたように、救いは「来る(あるいは『生じる、起こる』)」ものなのです。それは神から来ます。天地を造られた神から来ます。イエスさまがもたらすのです。そして、ザアカイがそうしたように、私たちを愛し、赦してくださるイエスさまを、私たちも喜んで歓迎して受け入れる時、罪と滅びからの「救い」を実感することができます。

最後に、イエスさまは言われます。「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」(10)「失われた人」とは、「滅び、無用無益、空しい、崩壊、殺人、永遠の滅び、喪失」を意味します。神から遠く離れている人、闇の中にある人、事故などで滅茶苦茶崩壊している人、あるいは死んでいる人、霊的生命力が微塵も無い人のことです。しかも、かつてそうであり、今もそういう状態にある人のことです。

ザアカイがまさにそうでした。彼は、金はあって表面は豊かでしたが、飢え渴いていました。「救い」を求めていました。人を生かすどころか、人の生き血を吸って生きる吸血鬼のような人間です。金持ちだけど、貧乏神です。死に神です。近寄りたくない、近寄ると搾取される、税金を吹っかけられる、巻き上げられます。だから死んでいたのです。霊的いのちを失っていました。崩壊した人生です。空しい、滅びた人生です。自分が滅びているのみならず、人の人生をも滅ぼす、貧乏にする、真っ暗闇の人生です。イエスさまは、そのような、死んだ、崩壊した、滅びている人を「捜して救うために来」られました。そして、そのイエスさまを受け入れる者は、「救い」を実感します。神の愛を実感します。自分も神に愛されている、それでザアカイのように、神の愛に応えて、それを喜んで隣人に分かち合うようになる、自分も生き、隣人も生かす、霊的生命力に満ちた、いのちある新たな人生を生きるのです。

ザアカイは「正しい人」「義人」という意味だと言いました。日本で言えば、「正」くんとか「正人」くん、「きよし」、「義人」です。でも、名前とは正反対の、悪い、罪深い人生を生きて来ましたが、イエスさまの愛を知って、その自分が受けた愛を他の人に施す人生に生まれ変わりました。伝承では、カイザリヤの司教になったとも、マッテヤ(使 1:26)その人だとも言われていますが、いずれにせよ、ザアカイは、イエスさまの愛を知って、真に「ザアカイ」となったのです。